喫　煙

「概略は、いまお話ししたようなことなんですが・・・。いえ、そうではありません・・いや、そうじゃないんですね。・・・それではですね、電話ではなんですから、明日、学校にお出でいただけませんか。詳しく説明が出来ると思いますので。・場合によってはこちらから伺ってもよろしいのですが・・」

夜の母親への連絡である。

「いいえ、こちらから伺います。何時頃がよろしいですか？」

電話の向こうから張りのあるきっぱりとした口調の哲朗の母親の声がした。哲朗の母親との「面談」は一年ぶり。

哲朗が一年生の時の夏休み、家庭訪問をした時以来のことである。

「入学式の時の先生の話をお聞きして、先生は心の広い人なんだなと思いましたよ」

「さてぇ、どんな話をしましたでしょう？」

「あの時、入学式のＨＲの時ですよ」と語尾を少し上げてから

「育ち盛りの子どもだから、色々なことがあるかも知れない。でも、そのほとんどは大なり小なり私たち大人にも心当たりのあることですからって、先生、そうおっしゃって、それから・・」と何か楽しいことでも思い出すかの様に目を上に上げながらコーラを勧めた。

「それから・・今の時代に私たち親が子供だったらみんなファミコンに夢中になっていたと思いますって、そうもおっしゃいましたね」

「ああ、そのことですか」

「ええ、私それを聞きましてね、ああ、この先生、いい先生だな、心の広い先生だなって思ったんですよ」

「ああ、そうですか。でも、それは多くの先生方共通の理解だと思いますけどね。育ち盛りの子どもを扱っているという考えは、どの

先生方にもあると思いますよ。ファミコンの件も同じですね。
私だけ特別のことではないと思いますけど」
ひと息ついてから言った。
少しぬるめのコーラが喉を刺しながら通り抜けていく。
「ちょっとしたことで良い先生にされたり、悪い先生にされたり、
その繰り返しですよ」
声にはならない言葉を二口目のコーラに含ませ喉に流し込んだ。
小さな「ゲップ」をみぞおちのあたりで感じて拳を口に当てながら目立たないように消した。甘い気体が鼻を突き抜けていった。
親が「良い先生」と言うときは、自分の子どもがその先生を好いているかどうかということが判断の最大の拠り所となっている場合が多く、子どもの成長や変化を将来を見通して判断してくれることは滅多にない。その意味では極めて情緒的で大人の判断領域が子どもの支配下にあると言っても良いほどだ。だから、昨日まで「良い先生」と言っていたのにある時期から「いやな先生」「余り感心しない先生」に変化する。
怠学や授業態度や校則違反等々で繰り返し指摘・指導される中で生まれる子どもの反抗心や反発感情がノン・フィルターのまま親に感情移入される。カウンセリングで指摘される留意点として「共感過多」の問題がある。悲しみや怒り・喜びが激しくぶっつけられたときセラピストは時に共感過多に陥ってしまう時がある。クライエントの状態を冷静に客観的に他との関連や動きの中で総合的・発展的に判断することが出来なくなってしまう。誰しも人の話を聞くときに心得ておくべき基本的事項と言っても良い。近年とみにと思うのだが、子どもからの感情移入をコントロールし子どもの判断力や好悪の感情を超えて教師を評価する親は、皆無ではないが、滅多にお目にかかれなくなった。
ずうっと以前忘れもしない有り難いある母親の言葉があった。「先生、うち子ども、先生に反抗しているでしょう？すみませんね。でも、先生、子ども達に言っているんですよ。

お前達がいくら反抗しても私と〇〇さんのお母さんは先生の見方だからねって」あの時、「ああー、そうですか」ってそっけない返事をしてしまったが、なんと有り難い言葉であったか。近年も、別な意味で「大人」らしい側面からのフォローを経験したことあったが、それらはもはや例外中の例外になってしまったように思われる。

「育ち盛りと言いましたのは、在学中いろんなことがあるだろうけれど、それらの一つ一つは大人になる成長過程でのことだとそう考えながら指導していきたいと私なりの考え方を言ったつもりなんです。これはどの先生も、どの親も、大人として誰しも持っていることだと思うのですが」

「そうですとも、そのことは良くわかりますよ」

「問題に応じて必要な指導をきちんとしていこうということですからね。厳しい指導があったり突き放したり色々な指導をひっくるめているんですけどね」

テーブルの上におかれた手ががっちりしている。肉体労働をしながら女手一つで四人の子どもを育ててきたその逞しさが肩幅の広さや精悍な顔つきに示されていると思った。

「ですから・・子どもには、目上の人の対する言葉遣いや態度がきちんと出来るように、小さい頃からいつも言い聞かせてきたんです。今の生徒さんはどこのお子さんも先生に対して友達のような話し方をして、それで平気なのですからね」

本当に困ったことだという風に眉間に少しばかりしわを寄せながら言った。

「うちの子もそんな話し方を先生方にしているのではないかと心配しているのですよ。どうなんでしょうか？」

確かにそう言えば、教師に対する話し言葉は他の生徒に比べるとかなり丁寧である。いわゆる「ため口」をしない生徒であった。

それに掃除の時も良く働くし自分から進んでゴミを捨てにいく。いやな顔をしないで積極的に働く。指示に対しても「はい」とはっきり答えてから行動に移る。印象的には成績を除けば申し分のない生徒である。

「お母さんが心配されるようなことはありませんね。その意味ではむしろ模範生です」

「そうですかあ」

いかにも安堵したという風に語尾を上げながら答えた。やや四角い赤ら顔にかすかなに自信が見えた。

「上の子三人も、やはり同じ〇〇高に通わせたのですよ。上の二人の担任の先生はA先生とB先生でした。二人ともとても良い先生でしたけど、三番目の子の担任はC先生で随分厳しい先生でしたね。うちの子はついていけなかったみたいですけど。ですから、今回哲朗の担任の先生はどんな先生だろうって心配していたんですよ。でも、本当に安心しました。先生で」

体格のいい、力持ちのしかも大柄な哲朗がほっぺたをぷっと膨らませながらときどき上目遣いで相手の顔色を見ながら話すそんな姿が目に浮かんだ。気が荒ければ手の付けられない暴れん坊であったに違いない哲朗が、中学生時代はいじめられっ子だなんてにわかには信じられないが、事実、そうであったと本人からも聞いたことであった。

「クラスでの人間関係も特別心配なことはないと思います。クラス全体としても穏やかで明るいですし、いわゆるいじめということも当面は心配されなくとも良いと思います」

まずその点に触れておく必要を感じて言った。

「それとこの近くの工場でアルバイトしているそうですね。哲朗君は見学旅行の費用のため貯金しているとか。そんな話をしていますが」「その件なのですが、実は・・」そう言いながらいかにも腹が立ってきたという感じで吐き捨てるように言った。

「どろぼうと疑われたのですよ」
「なんでまた？」と聞くに話はこうだ。
職場のおばさん達の間でこの頃、物がなくなるという話が出ていたそうだ。そのうちに、哲朗が怪しいということになりうわさが立ってしまったのだ。
「もちろん盗んでなんかいませんよ」
侮辱は許さないという口調で断固として言い切った。
「中学校を卒業したばかりの子どもによくもそんな無責任なことが言えたものだとあきれかえるやら腹が立つやらで・・それで私、直接、言いに行ったんですよ。そうしたら課長さんが謝ってくれましたけどね。それ以来、哲朗はアルバイトに行くのをいやがりましてね。　それで今、近くのコンビニに行っているんです」
「それはひどいですね。そうそう簡単にドロボー扱いをされてはかないませんものね」
「本当はアルバイトをせずに勉強をすれば良いんですけど、経済的にも大変な所もありますし、ケイタイを使っていますのでその使用料もありますので、それで認めているんですが・・・それよりも何よりもな社会体験と言いますか・・社会勉強ですから本人のためと思ってやらせているんですよ」と言った。
ほんの一瞬伏し目がちにしていた表情が普段の顔に戻った。

「あの時以来だな」
家庭訪問の時の会話や背筋をきちんと伸ばした、いかにも気丈な勝ち気な面もちを思い出していた。

哲朗の母親の来訪が告げられた。
応接室で型通りの挨拶のすませた。三時の約束だからちょうど五分前の到着である。

いつ雨がやんだのだろう。応接室の窓から陽が射してきた。
二十畳程度の広さの部屋に古びた四角いテーブルが三つおかれその周りを折りたたみ椅子が囲んでいる。ソファがテーブルから少し離れた窓際におかれ、その横には模擬試験の問題用紙の包みと橙色の花をつけた君子蘭がおかれている。古ぼけた白塗りの壁と暗い照明が応接室を一層、殺風景にしていた。
戦後の学校制度改革の中にあっても校舎の施設や部屋の名称がそのまま引き継がれ使用されているため、応接室という実態と合わない部屋が生まれているのだ。男子用トイレを紳士用、女子用トイレを淑女用と記した黒塗りの札を下げている学校がつい最近まであったのだ。
しかし、今や応接室を正式に設置している学校はほとんど皆無ではないか。というのも、来校する客には一般教員が応接する進路関係の客、つまり大学や専門学校の職員や会社関係の人事担当者、それに父母。ちなみに父母が来校するという場合は「指導」がらみや特別の場合であって世間一般の言う客にはほど遠い。教育委員会関係や気を遣うお客様は校長室に案内すればよい。そんな事情を考えれば、学校には応接室は不要であるらしい。

「ところで、電話でもお話をしたのですが、哲朗君がタバコを吸っていたのを、私が偶然、学校の帰りに見つけましてね、それで事情聴取をしたのですが、・・・」
「聞きましたよ、先生。ずいぶんひどい話ですね」
とうてい待ちきれないという風に話の途中で切り込んでそう言った。
「本人が吸っていないと言うのに先生方が入れ替わりで吸ったろ、吸ったろうと遮二無二、認めさせようとしているっていうんじゃありませんか」
「ちょっと待って下さい」

少し呼吸を整えてから言った。
「順番に話しますから最後まで聞いて下さい。いいですか。一昨日のことなんですが、私が夜、七時過ぎに学校を出ましてね。学校の駐車場を出ようとして車を出そうとしましたらですね、出口にある駐車場の垣根を飛び越えてくる人がいたんですよ。電灯のないところなんですが、車のライトで顔が見えたんです。
丁度、真正面にライトが当たった形になりましたから、見ましたら哲朗君なんですね。どうしてそんなところから飛び込んできたのだろうと思ったんですが、そのまま生徒の下校路の方へ車を走らせたんですね。そしてですね、坂をぐるっと回った下の所に信号がありますね、生徒の下校する門とつながったあの信号のところなんですが、ご存じですか」
母親がうなずくのを見て話を続けた。
「横断歩道の所には街灯がついていましてね。そこに来たとき信号が赤になったんですよ。それで待っていたんですが、その時、校門の方から生徒が四，五名坂を降りてきたんですよ。見ましたら先頭に哲朗君ともう一人同級生で、つまり私の担任をしている生徒がいましてね、その時、哲朗君がその生徒の隣にいてタバコを吸っていたんですよ」
「ちょっと待って下さい。それは哲朗ではありませんよ」
我慢できないというふうに母親は言った。紅潮した顔が怒りでいっぱいになっているが、それでも冷静に説明をして息子の無実をはらしたいとする意気込みが感じられた。
「哲朗からもその話は聞いていますが、これは友達のことだから言わないでくれといっている話なのですが、確かに、ぼく以外にタバコを吸っている人はいたと言うんです。しかし、ぼくは絶対に吸っていないって言うんです。きっと、先生はぼくとその生徒と見間違ったんだって言っているんですよ。先生、見間違いではありませんか？」
母親の口調は「見間違いです」と言ったのとほとんど変わらない

調子であった。

「それに、先生、どうしてその場で注意なさらなかったんですか。先生は、車から降りないでそのまま行ってしまわれたというじゃありませんか。哲朗も言うんですよ。なぜあの時、先生は車から降りてタバコを吸っている生徒を注意しなかったんだろうって。先生の車を見ていたらそのまま、すーっと行ってしまったって。その場で注意するならまだわかるけどそれを翌日になって、吸ってもいない人間を吸ったろう吸ったろうって言うのは納得できないって泣いて言うんですよ」

事実を正す点がまた増えたなと思った。ウソの上塗りというやつだが、それを信じている人間に頑固にへばりついた「塗られたもの」を剥ぎ取らなければならない。

「そこも、事実と違いますね。お話の途中なんですが、いま言われたことから話しましょうか」

腹が立ってきた。いつものパターンである。「ウソの上塗り」をして己の罪を逃れようとしている。しかもやっかいなことに母親がそれを何の疑問も持たず鵜呑みしている。「子どもがそう言っているが事実はどうなのでしょうか」という話ではない。教師が、見て見ないふりをしてそのまま行ってしまったと言う子どもの説明に「そんなはずがない。あろうはずがない」という単純な疑問すら持っていない。

「もちろん車から降りて捕まえるというか指導するというか、そう思ってルームミラーを見ましたら、すぐ後ろに車がおりましてね。それでその場で降りるのをやめたんですよ。すぐ青に変わりそうに思いましてね。運転手のいない車が信号の所に止まったままになっていては後ろの車の邪魔になりますからね。それで信号を渡ってから降りようと思って信号が変わるのを待っていたんですよ。」

話がくどくなってきた。相手が静かに聞いている間に言いたいことを言い切っておかないとまた別の話が出てきて論点が空中分解してしまう。

「それでですね、信号を渡ってすぐの所に大きなマンションがあってその駐車場のわきが少し広くなっているでしょう。そこの所に私の車を止めたんですよ。そして車を降りて生徒たちのいた信号の所を見ますと、蜘蛛の子を散らすように陰も形もなく逃げてしまっていたんですよ。それでも私は信号を渡ってその場所に行きましてね。タバコの吸い殻がないかどうか見ましたが、それはありませんでしたがね。事実はそういうことなんですよ。私の車がそのまま行ってしまったというのは違いますね」

そこまで一気に早口で言った。そして少し息を継いでから言った。

「しかし誰がタバコを吸ったかは、しっかり見たわけだから、明日、呼んで確かめればいいことだと思ってそのあとはそのまま帰ったんですよ。それに、私の車が止まったのを見て『みんなで逃げた』って一緒にいた他の生徒の事情聴取からもはっきりしているのですよ」

「えっ、そうなんですか？・・・でも、」

少し驚いて言った。

一重瞼の目が縦長に大きく開くのと同時に右の眉毛がぎゅっと動いた。哲朗と同じ眼だと思った。

「なんで呼ばれたかわかるね」

「いいえ」

きょとんとして、いかにもなんで呼ばれたかわからないという風な顔をした。

「本当に見当つかないかい」

「ええ」

そう言って首を傾げた。

「ん・・・。昨日の学校の帰り、タバコを吸っていたね？」

周囲には誰もいない。二人だけの会話が始まった。

生徒に対する事情徴収は、教師二人で当たることが通例となっている。教師の側の聞き違いも時にはあり得るが、それ以外にも、後になって言った言わないなど、事情聴取と異なる説明がなされることが、しばしばあるからだ。しかし、このときは二人っきりでじっくり話したいと言うこともあり希望して一対一の事情聴取となった。

「えっ、僕ですか？」

そう聞き返したとき眼が縦長に大きく開いて眉毛が動いた。

「いいえ、僕ではありません」

「昨日は何時頃帰った？」

「部活が終わってからですから、七時頃だと思います」

「昨日の帰り、車を駐車場から出してライトをつけて出発しようとしたらね、哲朗が駐車場の柵を乗り越えて来るのを見たんだどね。どうしてあんな所から入ってきたの？」

「ああ、あれ、先生の車だったんですか。・・・いや別に・・ただ急いで友達の所へ行こうと思ったものですから。すみません」

「そうか、わかった。そのことはいいんだ。そのあとなんだよ。私は駐車場を出てね、あの学校の坂を下ったところに信号があるだろう？生徒の通用門のそばにある信号だよ。あそこで信号待ちをしていたんだよ。そうしたら哲朗とDが街灯の下の所に歩いて来て、その後ろからも三、四人来たんだ。その時、火のついたタバコをくわえている哲朗を見たんだよ。それに後ろにタバコの赤い火が二つ見えてね」

哲朗は小首を傾げ口を少し膨らませるいつものクセをしながら、

「いいえ。僕じゃありませんよ」とはっきりとした口調で答えた。

「でも、先生、見間違いってあるんじゃありませんか」

紅潮した顔にあせりをただよわせながらも全身全霊を傾けてわが子

を守ろうとするむき出しの母性があった。
そう、子どもの頃だった。近所にひよこが生まれてみんなでそれを見に行ったことがあった。雌鶏のあとをついて回るひよこがかわいくて抱こうとして手を出したら雌鶏が向かって来た。手を引っ込めなかったら手に傷を負っただろう。
「違うんだよ。僕はただ、ひよこがかわいくてちょっと抱いてみたかっただけなんだよ。」
そう伝えたっかたけれど伝えるすべがなかった。あの時の遠い記憶を思い起こしていた。

「最後まで話を聞いて下さい。私の見た事実と他の生徒の事情聴取について説明をしますから」
そう言いながら、何かを言いかけた母親の言葉を制して話を続けた。
「火のついたタバコをくわえていた哲朗君の少し後ろにですね、顔ははっきり見えませんでしたが、タバコの火が二つ見えましてね。それで私は仲間内で、タバコを吸っているなと思って見ていたんですが、その時にですね、哲朗君の隣にいた同級生の生徒が・・先ほども触れた生徒ですが、・・・この生徒はタバコを吸っていませんでしたがね・・偶然こちらを見たんです。
そして、「先生だ、先生だ」と言うのが・・声は聞こえませんよ。でも、口の動きがそう言っているのがわかったんですよ。こちらを何度も見ながらそう言っているんですよ。そうしましたらですね、どこよ、どこよと言うふうな顔をしてですね、きょろきょろと、眼で人を捜しているんですよ。きっと、先生だと言うのを聞いて、私を探していたと思うんですがね。口のタバコに手を当てながらですね、こんなふうに・・」
そのときの哲朗の所作を真似して見せながら話を続けた。
「それにですね、タバコを吸ったときにタバコの火のあかりで顔がぱーと赤くなりましてね。その時の眼の動きや表情までもはっき

り覚えているんですよ」
「やっぱり、見間違いということは絶対考えられないでしょうか」
少しの沈黙があって母親がまた言った。
「考えられませんね」
きっぱりと言ってから更に続けた。「距離にしまして、ここからあそこの窓くらいの距離ですからせいぜい三、四メーターでしょうか。それに夜でしたが街灯もついていましたし、哲朗君と同級生の子がそこにいたことはきちんと確認されていますし哲朗君も認めていることなんです。ただ、タバコを吸っていたということだけは認めていないのです」
「あの子、もともとタバコ吸ってないんですよ。私も気を遣って子どもの部屋を掃除のときなど見るんですが、確かに灰皿がおいてあって吸いがらが入っていた時があったんです。それで、『哲朗、おまえタバコ吸ったの』と聞いたことがあったんですよ。そしたら、それは友達が遊びに来たときの友達の吸ったものだって言いましてね。僕、勧められて一度、口にしたことがあったんだけれど、具合悪くなって、それ以来、イタズラしてないんだって言うんです。僕の体に合わないからタバコ吸わないって言ってたんですよ。あの子、私にはウソは言わない子なんです。今までも、悪いことをしたとき、何々したんだけどごめんなさいって自分から言って来たことが何度もあった子なんですから」
気持ちが高ぶってきたせいか少し涙声になってきた。
「その時はそうであったんでしょうけれども、今回のタバコを吸っていたことは事実です。私が見たんですから。見間違いでは決してありません。それに他の生徒も後ろでタバコを吸っていた顔のわからなかった生徒達も誰かがわかりましてね、それぞれ自分たちがタバコを吸っていたことを認めているんですよ。それにタバコを配ったという生徒もわかりましたしね」
「そのことですが・・」
急に口調が抗議の調子になってきた。

「吸っていない生徒まで吸ったと言わせているというじゃありませんか。転校して来た生徒も吸ったって言わされているって聞きました。哲朗が言うんです。『みんな何回も何回も吸ったろう吸ったろうって言われるからつらいし、面倒くさいから吸ったって認めているんだ。僕もつらいし苦しいから認めて楽になりたいから先生の言うことに『はい』って言いたいけど、言ったらおしまいだと思って頑張っているんだ。僕は絶対、吸っていないんだ。死んだとうさんに誓ってもいい。僕は絶対、吸っていないんだから』

そう言って泣くんですよ。本当に吸ったらそこまで言うと思いますか？　哲朗は疑われて苦しんでいるのですよ」

悔し涙が眼の縁に浮かんでいる。先生、哲朗を信じて下さい。

生徒を信じて下さい。抗議と哀願の光が眼に浮かんでいる。

「疑っていません。間違いなく吸ったんです。私が見たんです。いいですか、私が見たんです。疑うなどという曖昧なものではありません。私がこの眼で、この両眼で見たんです」

腹ただしい気持ちで断固としてそう言い切った。

「お母さんがそこまで言うのはわからないわけではありません。今のお話を聞いてそう思いました。私も他人の見た話を聞いているだけで、本人からそれほどまでの話を聞いたら、どっちが本当だろうかと思うと思いますし、九九パーセント疑わしいと思っても、あとの一パーセントに確固たる自信がもてませんから疑いながらも信じてみようかということになったかも知れません。しかし、この件については駄目なんです。私が見たんですから」

そう言って応接室の窓の下を指さした。

「ちょうどあそこに花が見えますね」

ソファーの横の部屋の角に置いてあったクンシランの花を指さして言った。

「今、あの花を私が見たと同じように、タバコを吸った時、ぱーっと顔が赤くなって、どこだ、どこだって人を捜すしぐさで眼をきょろきょろさせながらしていた表情をはっきり見たのですから」

「困りましたね」
苦笑いを見せながらそう言って大きなため息をついた。そして再びクンシランの花に眼をやった。
事情聴取に対する誤解や哲朗の説明によって造られたイメージを出来るだけ払拭したいという気持ちが起こってゆっくり話し始めた。
「その転校生に対する事情聴取は、この部屋で行われたんですよ。私がここに座って彼がいまお母さんが座っているその横に座りましてね。一回目に他の先生が事情聴取したときに「吸ってない」って答えたままになっていましてね。それに、すでに吸ったことを認めた生徒がいた事や、それと、タバコを渡したという生徒もはっきりしたこともありましてね、その関連も聞く必要があったんですよ。それでその転校生にですね『なぜ呼ばれたかわかるか』って聞いたんです。そうしたら『わかります』って答えましてね。それで『タバコのことだよ』そういう言いましたら『はい』という返事をしてそこから二回目の事情聴取が始まったんです。タバコや高校生が時に犯す間違いに関して私の考えを述べたんですが、私の話が一通り終わってから『吸ったんだろう』って聞きましたらね、一度で『はい』って答えましてね。
別に、映画に出てくる刑事のように『吸ったろう、吸ったろう』って、机をたたいたりして取り調べて訳ではないですよ。当然のことですがね・・」
赤ら顔で疑っている風なところは変わらないが、落ちついて話に耳を傾けている。
「その時、その生徒はこう言ったんですよ。『今日は本当のことを言わないと駄目だなって思っていたんです』そう言いましてね、こんなことも話してくれたんですよ」
母親は視線を落として話を聞いている。

「てっきり先生に見つかったと思っていた」
その生徒はまずそう言ったんです。
「前の学校にいた時、暗がりで数人でタバコを吸っていたら、偶然、先生に見つかって、それで停学になったことがあったんだ」って言うんです。別にこちらから聞いたんではないんですよ。そして、「今回もてっきり見つかったとばかり思っていた」ってそう言ったんです。それから吸ったタバコはマルボロでそれは自分が持っていたものだって。もちろん、私の車が信号を渡ったあと止まったのでみんなで逃げた話もしていました。
「そうなんですか？・・・・」と、にわかには信じられないという風に母親は言った。
哲朗君にも同じように、同じ調子で話をしたのですが、がんとして吸っていませんと言いましてね。他の生徒も認めているんだよと言っても認めないんですよ。それで私は改めてこんな話をしたんです。
まず言ったことは、今、うちの学校の生徒のほとんど全員が、十人中、九人はタバコを吸っているだろうと思っているんだ。何処で、吸うか、一日に何本吸うか、その違いはあるけれど、ほとんど吸っているだろって、そう言ったんです。
そして更に続けて話したんです。
「その意味ではタバコで見つかった生徒は運が悪かったと言えるかも知れない。しかし、吸った場所や状況によっては明らかに学校や先生方をなめていたというか甘く見ていて見つかったと言える場合もあるしね。ただタバコについて言えばね、暴力や盗みなどとは性質が少し違うと私は理解をしているんだよ。もちろん、軽く考えているという意味じゃないよ。つまり、タバコは年齢が解決する問題なんだよ。法律的には二十歳まではだめなんだけど、実際の話で言えば、高校を卒業すれば堂々と吸っていておとがめがないわけだから。勿論これは良い悪いの話ではなく現実の話をしているんだけどね。しかし、暴力や盗みは幾つになってもしてはならない悪いこと

で、「絶対悪」と言えるものなんだよね。それに比べて高校生の喫煙問題の場合はね、丁度車のスピード違反の問題と似ていると思っているんだ。制限速度四〇キロの所を六〇や八〇，一〇〇キロで走ったら完全なスピード違反だろう。でも、高速道路では一〇〇キロで走っても違反ではないのだからね。高校生の喫煙は四〇キロ制限の所を六〇キロで走っているようなものなんだよ。しかし、二十歳になるとそれが許されるから喫煙問題は年齢が解決するんだ。でも、今はだめなのは知っているよね。だからタバコや酒で違反すれば指導されるし、それなりにきちんと反省もしてもらわなければならないんだよね。それはそれでしかたないことだよ。反省期間の中で色々自分を見つめて考えて欲しいと思って指導するだよ。」

こんな話をしながら哲朗君の顔を見ていましたけど、特別の反応もなく聞いていましたね。私はその反応のない、とぼけた風と言うか、そんな感じが気になりましたね。

「私はね、むしろ、そうしたことを隠し通すことの方を重大に思うんだ。実際はばれてしまっても”やっていない”ってウソを通そうとする、その気持ちとか、考え方とか、そっちの方が大変だなって思うんだよ。ウソを通せば、ばれなかったと思うかも知れないけれど実際は「ばれている」んだよ。タバコを吸っているのを見た人もいるし、同じ場所にいた人が事情聴取でその事実を認めているとかね。それは「ばれた」ことには変わりはないんだよ。最後まで事実を認めなかった為に学校から正式に処分を・・・これを先生方は指導を考えているんだけれどね、この指導から逃れることが出来ると思っているんだったらね、それは考え違いだね。必ずしもそうならないかも知れないよ。はっきり言って、今の状況は「ばれている」ことと少しも変わらないんだからね。

そんな話をした後にも、哲朗君にどうなの？と聞いてみたのですが、「いいえ、僕は吸っていません」と言うだけなんですよね。

「今までも何度か言ったことがあるけれど、みんなは今、育ち盛りだ。だから色々なことがある。大人のまねをしてタバコを吸ったり酒を飲んだり喧嘩をしたり、それに魔が差して万引きをしたり・・色々あると思う。しかし、そうしたことは、どの先生も同じだと思うけれど、どれも予定のうちというか、予測の範囲なんだよ。つまり、生徒によっては育ち盛りのこの時期に色々なことがあって当たり前、それはそれで仕方のないことだ。先生方や親にしてもそれなりに心当たりのあることでね。問題はそのあとどのように解決していくか。立ち直らせていくか。そっちの方を大事に考えてみんなと付き合っているんだよ。それに、その様なことがあったから「あいつは駄目な奴だ」とかそんな風にはどの先生も思わないと思うよ。むしろ、ばれているのに「やっていない」と言ってウソを通すことの方が罪が重いとか質（たち）が悪いとか、思われることになって信頼を失うし、人間的にも嫌われると思うんだ。もちろん停学はあると思うよ。だけどそれからのがれる為にウソを貫き通したらその何倍も大事なものを失うんではないかな。肝心なことは、反省は事実を認めることから始まるんだからね」

やっぱり、哲朗君の状態は一貫して同じなんです。未だに僕じゃありませんの一点張りで話を聞く態度にもビビッと伝わってくるものや哲朗君に伝わっているなと感じられるものが全くないのですよ」

「私、どっちを信じたらいいんでしょう。困ってしまいましたね」

苦笑しながら手に持っていたコートを羽織った。
右の靴のかかとをコンコンと玄関の床に軽く当てながら「今日は色々すみませんでた」そう言って頭を下げた。そして「もうおしまいですね。先生に全然信頼されていないし、どうしましょう」と言った。

哲朗の母親を見送った後、職員室に戻ろうと歩き始めたが、ふと雨上がりの外の「ひんやり」とした空気が玄関に流れてきたことを思い出し外靴にはきかえた。
職員玄関前の大きなおんこの木が雨にぬれ夕陽を受け光っている。秋になるとおんこの実が濃緑の中で赤くいっぱいなっているのを見るとなぜか満たされた気持ちになってくる。子どもの頃を思い出すせいだろうか。それとも、そこに漂う穏やかな暖かい空気によって世俗的世界から遮断されているという錯覚に陥るからだろうか。
そう思いながら時季になるとおんこの実を一つ、二つと摘んでは食べて楽しんでしまう自分の姿を思い出していた。前任校の卒業文集に「変わった先生と理由」のアンケートの中に名前が挙がったことがあった。理由欄には「おんこの実を食べるから」と書いてあった。
おんこの木の前で息を大きく吸って両手を空に向けて伸びてみた。そして静かに息を吐き出しながらゆっくりを手をおろした。
一瞬、軽いめまいがした。自分の体が軽やかにゆっくり回りながら宙に浮かんでいきそうになり快い気分になった。

「哲朗君にはこんな話をしたんですよ」
ついさっきまでの哲朗の母親との話を反復していた。

「ウソをつかない人間はいないと思う。私だって今までに何万回

ウソをついてきたか数え切れない。おそらくこれからだって内容は色々あるだろうけれどウソをつくことがあるだろうと思う。ウソというのは詐欺のように積極的に人をだまして自分の利益を得るというものもあるが、多くの場合は、とっさに自分を守るために行うことが多いと思う。不利益な事実を小さ目に言ってみたり言わなかったり、その意味でも「嘘」は本能的な防衛的なものなのかも知れない。大体は悪いことをしてそれを隠す場合が多いと思うけどね。

問題はその後だと思うんだ。ウソを言ってしまった後でウソを言ったことが恥ずかしいとか苦しいとか申し訳ないとか、本当のことを言わなければ駄目だという気持ちになって行く。それが時間とともに段々強くなって行く。そして、正直でなければだめだ。そして、これからは正直になろうと思う。子どもの頃からのその繰り返しが、正直な人間を造って行くのだと思う。私はそれで良いんだと思うんだ。だから、哲朗が私から「見たぞ」と言われて「吸ってません」って言ってしまったことは、仕方がないと思っているんだ。私はそのことを責めているんじゃないんだよ。問題はそのあとのことなんだよ。高校生の時期は正直であろうとする理性が、勝ち続けなければならない。その意味でも今が本当に大切な時期なんだ。

そう言ってわからせようと一生懸命、訴えたんですよ。私が見たんだよと何度も念を押して言ったんですがね。同じでしたね。

それに、友達同士のトラブルを防ぐ為に哲朗君には言ってませんが、一緒にタバコを吸ったと認めた生徒の中にこんな話もあるんですよ。一つはですね。「知らっぱくれればバレないから」って哲朗君がそう言ったと言うのです。もう一つは、哲朗君がいない時、他の生徒たち同士で「テツ、正直に言えばいいのにな。正直に言わないので俺達が迷惑している」

そんなことを仲間内で話しているそうです。

桜の木の下で足を止めた。昨日まで満開に咲いていた桜が今朝か

らの風雨のためにすっかり散ってしまっている。濡れて校庭の粘土質の土にへばりついて惨めな姿になった花びらを踏んだ。
靴と土の間から泥水がわき上がってくるのを見て足を踏み変えて、また花びらを踏んだ。そよ風に舞って静に散った桜の花びらがここにあるのではない。風雨に打たれて大地にたたきつけられた花びらの残骸がここにあるのだと思った。哀れとも思うし無惨だとも思った。桜の木を通り抜けるとナナカマドの木が連なって若葉をつけている。秋になると赤い実をつけるナナカマドが凛として見えるのは自分だけだろうか。そう言えば名前の由来について調べたことも確かめたことがなかったと思った。
いつであったか「七回かまどにくべても燃えない木だからナナカマドという名が付いた」と誰かが教えてくれた。
本当かウソかは知らないが、名前の由来の話からナナカマドが堅くてなかなか燃えにくい木であるらしいことをその時に知った。
小学生の頃だったと思う。
カラスがナナカマドの実を食べているのを見たことがあった。
その時、カラスが赤くなるのかなと思った。そして本当にそうなればいいと思った。童謡の歌詞と重なった為だろうか。とりとめもないことを思い出しながら、ゆっくり、ゆっくり歩いた。

今回のタバコの件とは関係なかったので母親には話さなかったが、他の先生からの事情聴取で哲朗が話していた内容も気に掛かることであった。

哲朗の話とはこうである。
友達数人と食堂に入ったその帰り食堂の主人が追いかけて来た。
哲朗がレジからお金を取ったという疑いをかけられたというのだ。
「取った、取ってない」の押し問答の末、近くの駐在所に連れて行かれた。その時、連絡を受けた母親が交番で「本人が取っていな

い」って言っているじゃないかと警察に食ってかかりやりとりの末、結局、無罪放免になったという話である。

その時のことを困惑気味に「母さんすぐ出てくるんだ」と言っていたという話だった。そんな話を思い出しながら日常的に哲朗の釈然としない行動なども思い出していた。

ある日のことだった。

掃除が終わって教室の中を点検していた時、哲朗が同級生の教科書の入った布袋からカンペンを取り出し中から小さなハサミを出しているのを見かけたことがあった。

「哲朗、何しているんだ？」

そう言った時「えっ」といつものとぼけた返事をしてから「ちょっきん、ちょっきん」と言って自分の耳の所にハサミを持っていきふざけた調子でその場を取り繕っていた。

「誤解されるようなことをするなよ」

そう一喝すると「はい。すみません」と言ってその場が終わった。

勿論あの時、哲朗が何かを盗もうとしたとは全く考えなかった。

ただ、人のものを勝手に開けたりいじったりすることへの非常識さ、安易さを指摘したのだった。

それに教室内での紛失問題は同級生相互の不信感を生み出す原因になるのでその分、神経質になっていたのだった。

そうだ、まだあったな、やはり掃除が終わって教室を点検していたときだ。鼻をかもうとしたがチリ紙の入った上着は職員室だった事に気づき困っていたところに哲朗が教室に入ってきた。

「哲朗、チリ紙持っていたらくれないか」そう言うと、「はい」と言って向かいの教室に入っていき、まもなくテイシュを持って来たことがあった。

「どうしてよその教室から持ってきたんだ」

そう聞いたところ「僕のを置いといたんです」

そう答えたことがあった。

あの時、変なことを言うな。なぜ、自分のテシュをよその教室に

置いておくのだ、そう思ったけれどそれはその場で終わってしまっていた。今考えるとどれも釈然としない誤解される行動の多い男だな、改めてそんな気がしてくる。

外から事務室が見える。声は聞こえないが何やら笑顔だけが見えている。なにげないふうをしながら事務室を通り過ぎて校長室の前に来ると客人がいるらしいことに気づいた。総務部長のD先生だ。総務部長というのは、規則で明示された主任ではないが何故か管理職希望者の多くが配置されているポジションである。

正式に法律で明示されない「その他」の主任の一つであるのにどうしてそうなっているのか、主任制問題のさなか疑問に思ったことがあった。こちら向きに話している総務主任と視線が合わないように下向きに視線をやると校長室の窓の下にガムと銀紙の包み紙が落ちていた。少し離れたところにはチリ紙も二つ落ちている。窓の下にはタバコの吸殻が少し古くなったのが一本落ちている。ずうっと、教室の下沿いに目をやるとそれぞれの教室の下にぽんぽんと紙類が幾つか落ちていた。

以前、勤務した学校でのことだが、校長室の窓の上からチリ紙が落ちてくるというので「担任の方から指導しておいて下さい」と校長直々の話があった。しかし、なかなか改まらないこともあって、比較的温厚な校長ではあったが「窓が開かないように錠をかけるように」と指示されたことがあった。あの時もだったな、校長との間でやりとりがあったのは。目の前の空間をゴミが通り抜けて行くのはまことにもって不愉快なことに違いない。担任からの指導に効果がないのに業を煮やしての指示だったのだろう。しかし、毎日鼻をつき合わせている担任とすれば「はいそうですか」と簡単に承諾するわけにはいかない。「いささか短慮に過ぎないか」と諌言申し上げるのは下っ端の勤めである。遠い昔を思い出しながら更に歩いた。似たような状況があった時は決まって「どこのクラスだ」とまず思

い担任を確認しながら「何を指導してるんだ」などと思ってしまうのだろうか。そんなことを考えながらゆっくりと歩いていくとグラウンドに出た。野球部のユニフォーム姿のかけ声が列になって走っている。

顧問は今年転勤してきた生徒指導部所属のP先生である。歓迎会の席上、生徒指導に関わる話が次々と出た。あの時、それぞれが悔しい気持ちをにじませての話が多かったように思う。そして、最後の締めが「これからの学校は大変だね」ということで終わった。

P先生の話。

警察で時として行われるという乱暴な取り調べは相手によっては必要なのかも知れませんよ。

勿論、学校ではあってはならないことだけど、警察ならやむ得ないのじゃないかな。多くの場合、相手が相手だからね。そうしないと犯人に逃げられちゃいますよ。勿論、冤罪事件にでもなったら大変なんですがね。

只、現場的な発想から言えば、取り調べでニッチもサッチも行かないことって沢山あると思いますね。

悪いことをする人間の中には、ある種の確信犯的な感覚でとことん開き直り「認めなさえしなければ疑われたままでも無罪だ」と考えている人間が間違いなく存在するんですよ。そして、疑われることは当人にとっては少しも「恥」でも「苦しみ」でもないのですね。

だからトコトンしらっぱくれるんですよ。それがそういう人達の世界では「ハク」がつくって言うか。そういう面は確かにあるように思うのですがね。

「確かにそうかも知れませんね」

そう口を開いたのはQ先生だった。「その種の人間にとっては罰からいかに逃れられるかと言うことが唯一最大の中心課題なんですよ。それ以外は少なくともその時点では全く眼中にないと思いますね。これは老若男女の違いもないし、知的レベルの各段階のそれぞれの

特徴を持って発揮されるのですよ。だからその延長線上に機械的に生徒を置くというのは問題はあるかも知れないけれど、しかし、あえて遮断する明確な根拠もないと思うのです。生徒の中にだって似たように考える生徒だって生まれていると思うのですよ。言葉やハートの説得がなかなか通じない生徒は中にはいると思いますね。残念ながら。百人に一人か千人に一人と言うことでしょうがね。もしかしたら今は「ぐーん」と増えているかも知れませんね」

そう言ってからこちらを向いて言った。「

先生の持論に反した意見なのですが、全てを育ち盛りの人間の課題解決の側面からだけでは捉えていいのかという疑問はありますね。もって生まれたものというものがあると思うんですよ」

色々な人間がいる。全てケースバイケースだ。真剣に付き合ってみて一つ一つ決めていくしかないというのが持論である。

一般化された「教育的ロマンチシズム」に基づく抽象的教育論を傍観者的無責任教育論だと断じて憚らない。全てが個別的なのだからその感動や失望、発見も一つ一つ確認する必要がある。生徒だからといって一般化してはならない。一つ一つの個別の事例をどれだけの教員と共有できるか。常にそれがテーマの中心だと主張するのだ。小さなすきや矛盾やごまかしを許さないという風に言い立てる。こうした物言いや理論建てと非妥協的な論争スタイルが必要以上に敵を作っている。

「先生は今まで、最後まで嘘を突き通す生徒と巡り会ったことがありますか」と、質問の矛先をこちらに向けてきた。

あの時は、「いなかった」と確かに答えたと思う。

「幸いにして最後には皆正直に話してくれましたね」

そう答えた。それは勿論嘘ではなかった。しかし、トコトン否定する哲朗を前にして、不安を感じてくる。他ならぬ目撃者である私を前にしても、話が具体的になっていても顔色一つ変えずに「自分ではない」と言い張る哲朗の気持ちが計り知れない。せめて顔色を変えるとか汗をかくとか、声が震えているとか、そんな人間として

の「苦しみ」を見せて欲しいと思った。もしかしたら哲朗が嘘を突き通す最初の生徒になるかも知れない、そんな不安がよぎった。

Q先生の体験が話された。話とはこうである。

ある生徒二人が頭髪検査で引っかかり違反箇所を直すために放課後床屋に行かされた。しばらく経って二人が帰ってきたのだが酒臭いのだ。指導部の先生や担任が入れ替わり二人の息を嗅いだのだが、酒の臭いが明白だったのだ。しかし、当の本人達は「絶対に飲んでいない」と言い張った。

その為、事情聴取が行き詰まったことがあった。

「その時のこと忘れませんね。生徒が言うんです」Q先生はいやなことを思い出す風に言った。

『先生、絶対に飲んでいないから信じてくれ』とその生徒は言った。そして、本当だと言う時、座っていた椅子から立ち上がって腰を前かがみにして体を何度も上下に振りながら言った。『先生、信じてくれ、絶対に飲んでいない』そして、こうも言った。『俺は、今まで色々悪いことをしてきた。だけど、今度だけは本当だ。絶対に飲んでいない。信じてくれ』あの時、間違いなくそう言ったのだった。だから「この生徒、本当に酒を飲んでいないのではないか」と思った。それでまた、その生徒の息を嗅いだ。顔にかかった息が、紛れもなく体内で発酵した酒の臭いだった。

他の先生も入れ替わり臭いを嗅いだのだけれど、異口同音に「酒臭い」と言った。蓄膿症に鼻中隔湾曲症、しかもアレルギーだから鼻にはあまり自信がない。しかしあの時、そんな自分にも強く発酵した酒の臭いがしたのだ。

それでその生徒に言ったんです。

「おまえの信じてくれと言う言葉にウソは感じられない。だからお前の言葉通り信じたい。しかし、私が嗅んだおまえの息の臭いは、

間違いなく酔っぱらいが出す息と同じ臭いだ。自分の鼻で感じた酒の臭いもウソじゃない。しかもここにいる先生方も同じ臭いを感じている。これも事実だ。だから、酒の臭いがするという事実も信じなければならない。お前達が否定しても繰り返し同じことを聞かなければならなくなる。このことが理解できるかい」

そう言って飲酒の事実を認めさせようとした。しかし、「絶対に飲んでいません」の一点張りだった。学校としての事情聴取の限界に突き当たった。どうしても認めないため、この先どうしようかということになり、生徒指導部と担任が話し合った。本人が認めないので無罪放免にするか。手荒い方法だけれど警察に頼んで飲酒運転を調べる方法で調べてもらうか。病院に連れて行って血液検査をしてもらうか。話し合いの雰囲気は、飲酒がはっきりしているのに一歩も前に進めないいらだちと悔しさがあった。

「このまま無罪放免という訳にはいかない。絶対に許せないという点では先生方の完全な一致があった。

しかし、前に進むためにはどうしたらいいのか。具体的にどんな方法が考えられるのか思案した。

考えられた最終結論は親にも臭いを嗅いでもらおうということだった。その結果、親までが「酒の臭いがしない」と言ったり「本人が否定しているからそれを信じたい」と言うのであれば、まことに悔しい限りだが、懲戒による指導はあきらめよう。もし親が飲酒の事実を認めた場合は、本人が否定していても、親の納得の上で指導に入ろうということにした。親を信じてこの状況を打開するすることにしたのだ。

親に直接確かめてもらう為、生徒と担任。生徒指導担当のQ先生の三人が家に着いたとき、丁度、裏の畑仕事から帰って来た父親とばったり会った。

「お父さん、まず、息子さんの息を嗅いでみて下さい」

そう言って父親の方にその生徒を近づけたんです。

そうしたら、父親の顔色が変わりましてね。
『お前、酒飲んでるな』
そう言ったかと思うと胸ぐらとつかんで、再び『お前酒飲んだな、酒飲んだな』そう言いながらぐいぐいと振り回したんです。怒りが体中にみなぎっていましたね。親としての迫力を感じました。
その時ですよ。『おー飲んだ。飲んだあー』その生徒がそう言ってね。反抗的な態度をしながらも泣き出したんです。

あとはトントン拍子だった。頭髪を直すために一緒に下校した生徒の部屋で二人してウイスキーを飲んだことを正直に話した。

停学指導に入ってからの面接指導で私はその生徒に言ったんですよ。
「あの時の絶対に飲んでいないと頑張っていたときのお前の顔や腰を曲げながら『信じてくれ』と言っていたその全てをビデオに撮ってお前に見せたかったと思う。おそらく自分がいやになるほど恥ずかしいと思うはずだ」そう言ったんです。そして、聞いたんです。
「どうしてあそこまで頑張ったのだ。酒の臭いがしてバレているのに」
するとですね、こう言ったんです。
『酒の臭いがいくらしても、飲んだって本人が認めない限り絶対にバレないと思った。臭いしかないし、それ以外証拠はないんだから頑張ればバレないと思った」
私はその時、考え込んでしまいましたね。「ばれる」ことの意味が違うんですね。つまり、本人が認めない限りは、ばれたうちには入らないのですよ。その点ではどこかの国の政治家と同じなんですよ。
でも、その生徒はその一件以来、ずいぶん変わりましたね。付き物がとれたかのように色々な点で良くなりましたね」

それまで黙って聞いていたR先生が口を開いた。

「その生徒の父親が正直で真面目な方で良かったですね。もしも、私が出会った父親や母親だったら、そうならなかったかも知れませんよ。きっと、臭いはしないって言ったと思いますね。良くて鼻が悪いからわからないなんて言ったかも知れません。もっとも私の場合は運が悪かったのかも知れませんがね」

R先生の話とはおよそ次のようなものだった。

校内巡視の時の話である。体育館の男子更衣室の近くでタバコの臭いがして「もしや」と思ってドアを開けると一人の男子生徒が火のついたタバコをくわえていた。その時、その生徒と目が合った。

生徒は火のついたタバコを指から離し床に落としてから上靴で踏み消した。そしてそのまま立ち去ろうとした。

「ちょっと待て」と呼び止めタバコの吸い残しをを拾い上げて言った。

「タバコを吸っていたね」という問いに「いいえ、吸っていません」と答えた。

「今吸っていたじゃないか」

そう言いながらタバコの吸い殻を差し出すと「僕のじゃありません」と言う。

「かあーっ」と、頭に血が上って「今吸っていたじゃないか」と詰め寄ったが、平然として「僕は吸っていません。

「変なこと言わないで下さい」とまで言った。

その後、指導部の事情聴取によっても、がんとして「吸ってない」と繰り返した。

放課後、生徒を連れて家庭訪問をして事情を説明した。

その時、両親揃ってこう言った。

「子どもを信じたい」と。

耳を疑いましたね。おまけにこう言ったんです。

「親が子どもを信じてやらなかったら子どもがかわいそうだ」

どこか、かなりおかしいと思いませんか。

S先生が言った。

「僕の場合はもっとひどかったように思いますね。年が若いせいか。なめてかかっていたのかどうかわかりませんが。すごい剣幕で、くってかかるんですよ。生徒じゃありませんよ。れっきとした四〇代後半の父親ですよ」

わき上がる悔しさをこらえながら言った。

「現行犯でないのになぜ、吸ったことになるんだ。本人が最後まで否定したらどうなるんだい。それでも停学にすることが出来るのか。只、タバコを持っていただけではないか。友達が吸ったのを見たとか言ったて、現行犯じゃない」そう言うんですね。そうして

「うちの子はバカだから、正直にすぐ白状してしまう。頭の良い子だったら最後までしらを切るんだ」とこれを子どもの前で言うのですよ。子どもに嘘を言えと言っているのと同じじゃありませんか。

これ、ホントのホントの話ですよ。しかも、子どもが問題を起こすたびに、2時間にも及ぶ長電話なんですよ。内容は、他の先生の批判と担任である私への批判ですね。批判というか、見当はずれの攻撃というか、終始、感情的でね。挙げ句の果てに教育局にまで電話されましたね」その時、初めてわかったことなのですがね、当事者である私への連絡や説明は一切なくて、校長の方に直接、電話をかけて事情を聞いたそうです。そのやり方も少しおかしいと思いませんか。

「そういう親はですね。大きな勘違いをしている所があるんですよ」

Q先生が言った。

以前の学校での話なんですが、今の話に出てきた父親と同じくすごく感情的に、いかにも学校に乗り込んできたという風で、ある先生にくってかかったんですよ。すると、隣に座っていたある先生が

「うるせーな、テメーのガキが悪い癖にガタガタ言うんじゃねえよ。

要するにテメーのガキが悪いんじゃないか」そう怒鳴ったんですよ。
そうしたら、「なにー」ってことになってね、とっ組みあいにでもなるかと思ったら「教師がそんな言葉を使って良いのか」って言うんですよ。そうしたらその先生。「親ならそんな言葉使って良いのか」って言ったんですよ。何しろ、その先生、柔道三段か四段という人でで体格もかなりいいものだから、あとは静になってね。それ以来、そんな調子での言い方は相手を見ながらだと思うのですが、少々良くなりましてね。

教員の場合は、何が邪魔しているのかわかりませんけどね、そう言う親と同じ調子で、「てめー」なんて、なかなか言えませんからね。そこまで自分を落とせないですよね。相手を何とかな冷静にさせて静かに話をして理解してもらおうとするでしょう？　でも、そういうタイプの親から見ると、それは教師の弱みに見えるんですね。きっと。文句を言えば言うほど困り果てて低姿勢になっているように見えるらしいのですよ。

それで感情的に高圧的に喧嘩を売る調子で攻めている所があるんだと思うんですね。完全な勘違いなんですがね。

中には、「その子どもに何度も注意したと言うけれど、何月何日、今まで何回注意したのだ。それが言えないなら何度も注意したと言うな」とまで言った親もいました。・・

そうかも知れないと思った。いずれにせよ、共通しているのは、「子どもを護る」という意味を完全に履き違えている。

停学から逃れる為に親も嘘を言ったり事実を隠したり教師や学校のちょっとしたミスを突いて有利に事を進めようとすることは、子ども護ったことにはならない。

親だって本当は子どもの嘘を見抜いている事が多いはずだ。しかし、そうしたタイプの親の共通項としては、子どもに断固とした態度で物が言えない。「嘘を言うな。そんなバカな話があるか」と言って「正直に話す」ことを妥協なしに要求し迫ることができない。

「子どもが怖いのでしょうね。きっと」

S先生が口を挟んだ。

親が子どもをかばいたい気持ちだけから、子供の言い分を「信じた振り」をした時、子どもの発達にどんな弊害が生じるのか。その点をもっと真正面から取り上げて議論する必要があると思いますね。

子どもが真実と向き合おうとしたとき、親の「子供の嘘を信じた振り」は、親の想像を超えた大きな壁となってしまうのではないかと思うのです。子どもにとって自分の嘘が親から「信じられている」との思いこみは「嘘にいつまでもしがみつく」結果を生み出すことになるのですからね。そんな経験が結構ありましたから。

誤解を恐れずに言えば、親はもっともっと、子どもを疑って良いのだと思いますけどね。

「本当か。大丈夫か」と迫り本心から納得・安心するまでトコトン疑問をぶっつける必要があると思いますよ。

いじめの問題だってそうですよね。加害者の生徒が「遊びの延長でいじめるつもりはなかった」とか言ったときなんかもそうですよ。

「お父さんやお母さんが納得できなことを、どうして他人が納得できるか」

そう言って真実に迫って欲しいのですよ。

私が経験した例で言えば、「この子は体が大きいから、ちょっとさわった程度でも、たたいたとか、いじめたとか受けとられたんじゃないですか？」なんて言う親が、かなり多かったと思いますね。私は思うんですよ。

万が一、子どもが間違いを犯した時は、それはそれで仕方がないことですね。育ち盛りの子供なんですからね。いろいろな問題を起こして当たり前という年頃なんですね。問題はその時なんですね。

親は素直に子どもの前で、何度も頭を下げる必要があると思んです。そうした親の姿を子供に見せることが大事だと思いますね。

「そのことが子供を育てることになる」という考え方を親が持つ

必要があると思うのです。そんな形で親の愛情を子どもに伝えて欲しいのですよ。
相手を攻撃して子供を守ろうとするのは逆だとおもうんですよ。
子どもの過ちは大人になっていく上での大事な一種の洗礼のようなもですから。それが肥やしになるのですから。
どの大人にとっても「いつか来た道」のはずです。
そのことを教師と親が共通理解して連帯の土台にする必要があると思うのです。

相当、酒が回ってきたのだろう。あの夜、S先生の熱弁は続いたのだった。
歓迎会の夜の議論を、哲朗の問題とどう繋げていけるのか。そのことをよく考えてみようと思った。

そろそろ、職員室に戻らなければ・・・。
腕時計を見ながら急ぎ足で職員玄関に向かった。
考えてみると校舎をひとまわりをしたのは転勤三年目にして初めてのことだった。
体がすっかり冷えきっている。運動部の生徒のかけ声が聞こえる。
下校する制服姿がぱらぱらと見かける。